

西宮市立郷土資料館の収蔵資料を使った授業実践

肥後 博（西宮市立西宮養護学校教諭）・俵谷和子（当館学芸員）

はじめに

西宮市立郷土資料館では、博物館、学校やその他関係機関との相互協力として収蔵資料の館外貸出業務を行っている⁽¹⁾。貸出先は主に展示を目的とした博物館施設であるが、年に数例市内小学校へ教材として貸出することがある(表1)。国語科での糸車や社会科の「むかしのくらしの道具」での陳列方法としての利用である。しかし、これまで貸出先で児童たちにどのような反応があったのか、また利用にあたり要望等担当教諭から意見を求める機会を持つことがなかった。

そのようななか平成25年度・26年度に、市立西宮養護学校より体験学習用として石臼及び茶臼を使用したいと貸出申請があった。そこで、同校教諭である肥後博氏に依頼し、授業での実践報告についてご寄稿いただいた。

当館では、かつて「土よう展示室」として、収蔵資料を使ったハンズオン展示を行っていたが⁽²⁾、近年はワークショップでの製作という事例が多くなり、展示以外の館蔵資料の活用の機会が減っている。今後の活動を検討するうえでも、貴重な報告である（俵谷）。

1. 石臼を使った小麦の製粉

(1) 日時

平成26年（2014年）6月19日(第1次)・7月8日(第2次)

(2) ねらい

- ・畑で小麦が実っていくことや小麦がどのようにしてできるのかを知る。
- ・小麦の脱穀や石臼を使った製粉作業を通じて昔の人々の生活を体験する。
- ・小麦粉や小麦粉でつくった生地感触を味わう。
- ・小麦粉を使ってほうとうをつくり、地域の郷土料理に興味を持つ。
- ・支援者と協力して積極的に作業を行い、達成感を味わう。

(3) 対象

(4) 展開

第1次

学習内容	指導上の留意点・支援者の動き
1 小麦に関する説明を聞く。 ・小麦の歴史について知る。 ・小麦の歴史に関する説明を聞く。 ・小麦粉や小麦の種に触れる。 ・小麦の成長過程を映像で確認する。	・指導者に意識を向けるように支援する。 ・小麦や小麦粉の感触を尋ねて言葉を引き出したり、一緒に味わってその感触を生徒と共有したりする。
2 農園に移動して小麦を収穫する。 ・車椅子から降りて小麦の観察をする。	・車椅子から降りてできるだけ近くで小麦を見ることができるよう支援する。
3 収穫した小麦を脱穀する ・日陰に移動して箕に収穫した小麦を入れる。 ・麺棒や軍手を使って穂と種をばらす。 ・箕を上下に動かしながらうちわであおぐなどして種以外を風でとばす。 ・種を集めて紙コップに入れておく。	
4 家庭科室に移動して石臼で製粉する。 ・ふるいにかけて小麦粉に仕上げる。	

第2次

学習内容	指導上の留意点・支援者の動き
1 小麦の収穫、石臼による製粉の様子を写真で確認して前時の復習をする。	・テレビ画面に意識を向けるように支援する。
2 完成した小麦粉を見る。	
3 武田信玄と「ほうとう」の写真を見て、山梨の郷土料理であるほうとうをつくることを確認する。	・感触をしっかりと味わうことができるように支援する。 ・それぞれの食材の感触や匂いを感じられるようにする。
4 ほうとうづくりに取り組む。 ※小麦粉、味噌、鍋さえあればどこでもほうとうができたことを知る。	・生徒が取り組みそうな作業と一緒に行う。難しい作業は支援者で行い、作業に注目させる。

(5) 授業を終えて

本校は肢体不自由を主とした重複の障害のある児童生徒が多く在籍している。そのような児童生徒にどのようにして教科の内容を伝えていくかを考えた時に、教科の内容をただ単に説明していくのではなく、児童生徒の五感を刺激するような授業、つまり実際に体験する授業が大切であると考えた。そこで歴史的な観点から昔の人々の生活を体験していく授業を実践することにした。

感触を味わうことや手軽につくれるということから、「うどん」作りの授業は行われることが多い。この「うどん」作りを通して、昔の人々の生活を体験する学習につなげていくことはできないかと考えた。そこで「うどん」の原料である小麦がどのようにしてできるのか、そしてその小麦を昔の人々はどのようにして粉にしていたのかを体験を通して生徒たちに伝えていくことにした。

小麦は全農兵庫に依頼して種を分けてもらい、その種を収穫前年の11月頃に学校の農園に蒔いた。土づくりをきちんとしておけば、麦踏み等の作業はあるがほとんど手入れをせず育てることができた。6月に収穫し、それを昔ながらの方法で脱穀した。そして郷土資料館から石臼を借りてきて脱穀した小麦を粉にする作業を行った。生徒はなかなかまわすのが難しかったが、教師と一緒に取り組んで貴重な体験をすることができたのではないかと考える。また、一人でぐるぐると回すことができた生徒もいた。挽いて粉にしたものを振るいにかけてさらにまた挽くという作業を繰り返し、畳1枚ほどの広さの畑から200g程度の小麦粉をつくることができた。

この小麦粉を使ってうどんではなく、戦国大名の武田信玄の軍隊が食べていたとされ、現在も山梨の郷土料理にもなっている「ほうとう」をつくることにした。野草を加えて、鍋、小麦、味噌さえあればどこでもつくれて栄養満点であることを作りながら学習することができ、兵隊の食事ではあるがここでも昔の人々の生活の様子を体験することができたのではないかと思う。

2. 茶臼を使った抹茶に関する授業

(1) 日時

平成26年(2014年)7月16日(水)

(2) ねらい

- ・修学旅行の行き先である京都の特産の抹茶に興味を持つ。
- ・茶臼を使ってお茶を抹茶にする作業を通して、抹茶がどのようにしてできるのかを知る。

(3) 対象

西宮養護学校高等部3年 男子3名 女子1名

(4) 展開

学習内容	指導上の留意点・支援者の動き
1 映像や歌を通して修学旅行の行き先である京都嵐山がどのようなところかを確認する。	・テレビ画面に意識を向けるように支援する。
2 嵐山で有名なものとして抹茶があることを知る。	
3 抹茶の製造工程の映像を見て、そこに茶臼が使われていることに気づく。	
4 茶臼を使って甜茶を抹茶にしていく。	・甜茶の感触や匂いなどを味わえるように支援する。
5 できた抹茶を使ってお茶を点でて味わう。	

(5) 授業を終えて

毎週水曜日の6校時は社会科の授業を行っている。1学期は地元の特産について西宮産の葉物野菜、猪名川の椎茸、神戸のキャベツ、淡路のたまねぎ、明石のタコなどについて実際に触れたり味わったりして学習した。兵庫県に限らず、周辺の県についても学習していこうと考え、修学旅行の行き先である大阪、京都を選んだ。京都では、特産物として有名な抹茶を学習した。抹茶を味わうという授業はこれまでも行われてきたが、ではその抹茶がどのようにしてできているのかは学習できていなかった。歴史的な観点も踏まえて昔の人々の生活を体験するというので、郷土資料館から茶臼を借りてお茶を抹茶にする工程を実際に体験した。自分でまわすことが難しい生徒もいたが、石の間から粉になったものが出てくる様子を興味深そうに見ていた。やる気満々で楽しそうにまわしている生徒もいた。茶臼で挽く前のお茶を甜茶というが、ネット販売でしか手に入らなかった。収穫したお茶に触れたり、そのお茶が甜茶になって抹茶になっていく様子を映像だけでなく実際に触れたりすることができればさらにいい体験授業になるのではないかと思われる。

註

(1) 西宮市立郷土資料館条例第3条4項に「博物館、学校その他の関係機関と相互協力を行うこと」とある。

(2) 西川卓志「土曜てんじ室について」（『西宮市立郷土資料館ニュース』8号 1991年1月）・俵谷和子「最近の「土よう展示室」の傾向について」（『西宮市立郷土資料館ニュース』20号 1996年7月）。



写真1 石臼を使った小麦の製粉



写真2 茶臼を使った抹茶に関する授業

申請年月	学校区分	資料名(点数)	使用目的
平成24年1月	市立小学校	火鉢・羽釜・ざる・おひつ・火消し壺・すげ笠・矢立(7点)	3年生社会科学習資料
平成24年10月	市立小学校	DVD「西宮のおいたち」(1点)	市内見学事前学習資料
平成24年10月	市立小学校	羽釜・おひつ(2点)	3年生社会科学習資料
平成25年6月	市立養護学校	石臼(1点)	小麦をひく体験学習
平成26年1月	市立小学校	湯たんぼ・火鉢・羽釜・おひつ・火消し壺・わらじ・ぞうり(7点)	3年生社会科学習資料
平成26年6月	市立養護学校	石臼(1点)	小麦をひく体験学習
平成26年7月	市立養護学校	茶臼(1点)	甜茶をひく体験学習
平成26年9月	市立小学校	収蔵図書(13点)	3年生総合学習資料
平成26年10月	市立中学校	DVD「西宮のおいたち」(1点)	授業用教材
平成27年1月	市立小学校	湯たんぼ・火鉢・羽釜・おひつ・火消し壺・ゲタ(6点)	3年生社会科学習資料

表1 平成21年度から26年度の学校への館外貸出状況

西宮市内の地蔵の追加調査報告（下）

細木ひとみ（当館嘱託）

●地蔵番号（名称、呼称）

(i)所在地／(ii)形状（判断がしにくいものには（カ）と記す）／(iii)聞き取りなど特記事項
（地蔵の形状の詳細は、西宮歴史調査団・調査報告書第2集『西宮の地蔵』を参照していただきたい。無くなった地蔵は「■地蔵番号」で記している。）

●甲陽園東山町 [1]（子安地蔵尊）（『西宮の地蔵』58頁）

(i)甲陽園東山町9 甲山大師道沿い

※工事のために一時移設されていたが、平成25年11月に「地蔵さんが戻ってきている」との情報をいただいたので調査を行った。

(ii)祠内に3体あり（写真14・15）。中央の①はa丸彫b立像c右手に宝珠（カ）を持ち、左手で子供を抱く、右の②はa丸彫b坐像c不明、左の③は不動明王。



写真14 甲陽園東山町 [1] の地蔵



写真15 甲陽園東山町 [1] の祠

■津門住江町 [1]（『西宮の地蔵』114頁）

祀っていた方が亡くなり、お世話をする人がいなくなっていたので、津門住江町の自治会と用海町 [1]（圓滿地蔵、『西宮の地蔵』35頁）のお世話をしている人が話し合い、圓滿地蔵境内に移設することとなった。これは、津門住江町 [1] の地蔵について、「用海町3（圓滿地蔵の住所）にあったお地蔵さんをここへ移した」と言い、「地蔵さんを移すとき、嫁入り



写真16 津門住江町 [1] のお性根抜き

（よそへ移ること）を嫌がって公園に行く途中の川へ飛び込んだ」という伝承があっ

たことによる（この伝承は『西宮市立郷土資料館ニュース』15号の「西宮の地蔵盆」参照）。

平成25年9月29日の午前9時20分ごろより、津門住江町の津門中央公園内にあった祠前にて、信行寺（用海町1-22）の住職によりお性根抜きが行われ、津門住江町〔1〕の地蔵は用海町へ移された（写真16・17）。その後、圓滿地蔵境内にて信行寺住職によりお性根入れが行われた（写真18）。

※地蔵調査班の調査時には施錠されており、調査できなかつた地蔵の形状を追記する（写真19）。

(ii)a舟形光背(カ)・浮彫b坐像(カ) c不明(印を結ぶカ)。

おわりに

西宮市では、年々路傍に祀られている地蔵が減少しており、地蔵盆の内容も変化が著しいため、市内の地蔵の現状把握ができ、記録に残せたことは大きな意味があった。

『西宮の地蔵』刊行後は、郷土資料館の展示（第27回特別展示「西宮の講」で地蔵講や観音講などを紹介）や歴史講座（平成25年6月に「西宮と地蔵信仰」を開催）、歴史ウォーク（平成25年5月に「生瀬・木之元の地蔵を訪ねる。」を開催）などで活用し、また西宮市の情報誌『宮っ子』でも地域の地蔵や地蔵盆の紹介に活用されているのである。

現在も地蔵盆調査は継続中で、2、3年後を目途に『西宮の地蔵盆』としてまとめる予定である。



写真17 用海町〔1〕の境内へ移設



写真18 地蔵へのお性根入れ



写真19 津門住江町〔1〕の地蔵（中央）

<追記>

『西宮の地蔵』刊行後、多くの方から未発見の地蔵や移転した地蔵、無くなってしまった地蔵の情報をいただきました。情報をいただきながら、まだ未調査の地蔵も数ヶ所ありますが、ここに記してご協力を賜りました皆さまへの感謝の意としたいと思います。

それとともに、調査できなかつた地蔵のことをご存じの方（すでに無くなっている地蔵も含む）、また地蔵や地蔵盆の昔の写真をお持ちの方がいらっしゃいましたら、郷土資料館（0798-33-1298）までご連絡ください。今後の調査に役立てたいと思います。

新収資料「武田尾図絵巻」について

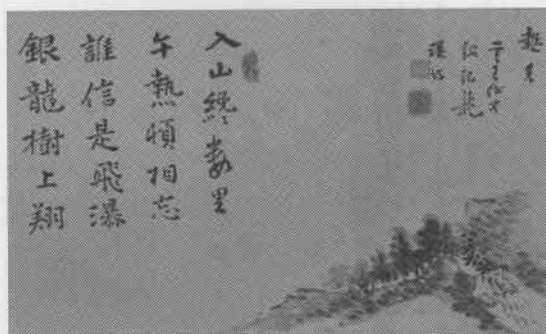
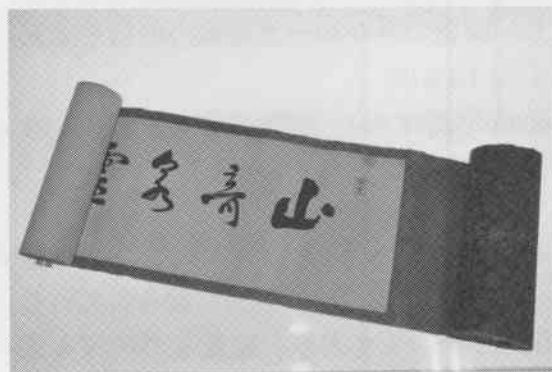
俵谷和子（当館学芸員）

平成26年度に新収資料となった「武田尾図絵巻」について紹介する。この絵巻は、天地約30cm・長さ約6m。漢詩に山水図風風景画を挿入する。資料に紀年銘がないが、「戊申夏の日」とあること、本紙に使用されている絹目の織り、落款の仕様や文字などに幕末以降の特徴を持つことから、明治41年に製作された絵巻だと思われる。これまで、武田尾温泉に関する資料は皆無であったことから、貴重な収蔵資料となった。

武田尾温泉は、寛永18年(1641)豊臣方の落ち武者であった武田尾直蔵が発見したという伝承が残されているが、詳細はあきらかではない。『有馬郡誌』には、閑雅幽邃の境にして文人墨客の来り遊ぶ者多く、夏の納涼は言ふに及ばず雪月花の風景絶佳なると評されている。

明治32年阪鶴鉄道（現在のJR福知山線）武田尾駅が開業され利用客が増加し、明治末期から大正にかけて三田焼の陶工である芝寅山を招いて武田尾焼が焼かれた。しかし、数年で消窯したと伝わる。

また武田尾温泉は、平成23年度から2ヶ年実施された文化庁の名勝に関する総合調査事業で、「御前浜」「名次山」「西宮神社苑池」「甲山」「漢織呉織伝承地」「蓬莱峡」などとともに名勝地に採択された。本資料が武田尾温泉研究の端緒となるとともに、名勝地に対する市民の意識向上となれば幸いである。



目次 CONTENTS

- 西宮市立郷土資料館の収蔵資料を使った授業実践（肥後博・俵谷和子）…1
- 西宮市内の地蔵の追加調査報告（下）（細木ひとみ）…6
- 新収資料「武田尾図絵巻」について（俵谷和子）…8